

学生と喫煙

守弘 仁志 大野 哲夫

熊本学園大学（以下本学）は、学生の健康とよりよい環境を求めて、今年4月から「建物内全面禁煙」となり、キャンパスでの勉強の環境をより安心・快適なものにしようと努めています。そこで、本学の保健室の内村公子先生に学生とタバコについてインタビューを行いましたので、ご紹介します。

○本学の禁煙への取り組みについて

——これまで中庭にある学生広場での喫煙が多かったのですが。

ようやく学生広場が禁煙となり、本来の憩いの場になったことで学生には好評です。タバコへの取り組みはグリーンキャンパスや学生自治会、関係者がこれまでキャンパスの清掃で取り組んだり、組合でも取り組みがなされたりしていました。学内の「安全衛生委員会」でも当初からいろいろな話し合いが行われ、分煙や喫煙所を作ったりしましたが、今回ようやく4月からの建物内全面禁煙が実現しました。

学生広場が禁煙となることでキャンパスの環境がよくなり、学生も憩いの広場を取り戻しました。ただそのため喫煙場所が図書館と食堂の間など3ヶ所設けられましたが、まだ完全に整備されていないため、空気も悪く、お昼時などはベンチに座りきれない学生がしゃがんで喫煙したりするので、その周辺は歩き

たくないとか、歩きづらいといった学生の苦情も耳にします。吸い殻入れがおいてあるにもかかわらず、周辺に吸い殻が散乱していたり、たまに歩きタバコを見かけたりしますので、まだまだマナーの面でも徹底していないという印象を持ちます。

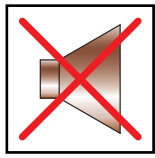


キャンパス中庭は禁煙になるとともに清掃活動も実施されている

○健康増進法と環境

——学生の喫煙状況は？

「健康増進法」が平成14年に公布され、健康維持を国民の義務としており、社会的にも禁煙や分煙が当たり前となってきています。多くの人が利用する施設では受動喫煙を防止することが管理者に義務化されていますので、公共の施設での禁煙もすすみ、喫煙者も少しずつ減ってきています。本学の学生の喫煙率を見ると、男子学生は約32%で、女子学生は約10%（平成15年学生生活実態調査）になっ



ています。他の調査や統計を見ると、大学入学時には5%だった喫煙率が3年生になると30%ぐらいに跳ね上がっています。やはりコンパなどでの飲酒と深いかわりがあり、喫煙が徐々に習慣化されていくことが大学生の特徴かなと考えています。

——タバコは若者の健康によくないので、大学は学年が上がればむしろ喫煙者は減っていくことを望むわけですが、実態は逆になっているのですね。

はい、それまで興味本位で吸ったり、たまに吸っていた学生が学年上がるにつれ習慣化していく傾向があります。

○タバコの害について

——タバコの害についてですが？

タバコはニコチンはもちろんアンモニアなど40以上の発ガン物質が認められています。普通タバコというと肺ガンが言われますが、喫煙者は肺ガンに限らずほとんどのガンで発症率が高いことが統計上示されています。また気管支炎や胃潰瘍、心筋梗塞などの血管の病気にも関連があることが同様に示されています。特に女性では胎盤の血流が悪くなることから死産や早産の危険性が指摘されています。

タバコの血管への影響が身近にわかる例としては、健康診断に立ち合っているときに、タバコを吸った直後に血圧検査を受けて高血圧とされる学生がみられます。再検査の時、直前にタバコを吸っていないと今度は正常な血圧が出ますが、吸っていればまた血圧が高くなります。再検査時に「タバコを吸いましたか」とたずねると「そういえば吸った」と回答する学生をみかけたりします。

近年の傾向としては、成人全体の喫煙率は下降しているのに、20代女性の喫煙が増加し4人に1人の割合になっていることです。これは出産する年代で増加しているということでも心配なことです。

また受動喫煙の問題もあります。喫煙者が吸う主流煙よりタバコから直接出る副流煙の方が発ガン物質が多く健康に害のあることが知られています。大学でいうと同級生、友人に健康の害が及ぶということです。本学の3ヶ所の喫煙場所も決められた広さのある空間に設置されているわけですが、それでもそこを通る学生に受動喫煙の可能性は否定できません。

特に女子学生には将来、妊娠・出産するというような人生計画を描いているとするならば喫煙はすすめられません。喫煙は大量のビタミンCを消費するので肌にもよくありません。ファッションのことを気にしているのに喫煙をしているのは矛盾しています。



○未成年者への害

——特に未成年者にとって喫煙はどのような害があるのでしょうか？

未成年者は成長過程にあるわけで、有害物質の影響が出やすく害になりやすいといえま

す。短期間でニコチン依存症になりやすく、発ガン率が高くなったりします。現在では未成年者でもニコチン依存症と診断されればニコチンパッチによる治療が可能で、熊本にも治療を行う病院があります。また2年ほど前から保険の適用も可能になりました。

先ほども述べましたが、特に学生の場合、学生が集まるコンパなど酒の席ですすめられてタバコにはじめて触れたり喫煙したりする場合があります。そこで喫煙を経験してから習慣化していくというプロセスをたどるようです。



○タバコをやめたいときの相談について
——学生がタバコをやめたいと思ったとき、どこに行けばいいのですか？

保健室の相談窓口へ来ていただければ本人の話の聞いたり、禁煙のアドバイスをしたりします。また、「禁煙マニュアル」を貸し出したり、「依存度が高い」という相談でしたら治療を実施している病院の紹介をします。またインターネットの「大学禁煙化プロジェクト(奈良女子大学)」(www.nara-wu.ac.jp/hoken/annai3.htm)を紹介したりします。この「大学禁煙化プロジェクト(奈良女子大学)」では喫煙学生の禁煙を支援するために

ニコチンパッチを無料提供したり、携帯電話でアクセスすることもでき、申込者には携帯のメールで禁煙のサポートをしています。

禁煙には「個人の意志」が強調されますが、依存症の場合、喫煙することによりドーパミンによって集中力がつくということから、身体の依存を生むこと、また「食後に喫煙する」や、酒席で場をもたせるために喫煙する、などが習慣化されることで心理的な依存を生むことの2種類があります。このような依存のもとでは、個人の意志の強さや精神力のみで禁煙にこぎつけることは難しいと思います。周囲に禁煙を宣言するなどまわりの力も必要です。

ただ、実際には保健室に喫煙・禁煙の相談に来るまでの学生は今のところ皆無とってよいでしょう。しかし、大学での喫煙は若い人たちが勉学を行っている場で健康を損なうことになるわけで学校という場にはふさわしくないのではないかと思います。

(インタビュー：7月5日)

(本学研究所研究員 守弘仁志
情報メディア論)
(本学研究所研究員 大野哲夫
社会心理学)

